

日本語学習が導く自己アイデンティティの変容

ーオーストラリア人の日本語学習者を事例としてー

Transformation of Self-Identity Led by Learning Japanese

- A Case Study of an Australian Learner of Japanese

新井 克之

要 旨

本稿は、言語学習とアイデンティティとの関わりという視座から言語教育による学習効果について考察する。そのため、オーストラリア国籍の日本人の母とハンガリーからの移民の父を持つ元日本語学習者（以下、学習者）が、日本語を学習していた際に感じていた内面について PAC 分析を行った。PAC 分析は特に本人ですらあまり意識していなかったような意見が引き出させるといった特徴を持つが、調査の結果、学習者は意図せずとも日本語学習を通して、日本文化への学びを深めつつ、自らのアイデンティティを更新させていたことが分かった。

キーワード：自己アイデンティティ、社会システム理論、構造化理論、実践的意識、PAC 分析

1. はじめに

本研究では、言語学習とアイデンティティとの関わり及び言語教育による多様な学習効果について考察する。そのため、日本人の母とハンガリーからの移民である父を持つオーストラリア国籍の元学習者が、日本語を学習していた際に感じていた内面について PAC 分析を用いて分析を行った。

まず、本研究で使用するアイデンティティという概念について確認する。アイデンティティとは、フロイト派の心理学者エリクソン (2011[1959]) によって初めて使用されたものであり、日本語では「同一性」「存在証明」と訳す。高橋 (2012) はアイデンティティと日本語学習の結びつきについて、心理学・社会学の視点から言語教育との関わりを整理した。そして、言語を使用しながら発生する他者との相互作用によって再帰的にアイデンティティを更新していく様相を自己アイデンティティとし、その育成をふまえた日本語教育について論じた。本稿においては、高橋に倣い学習者が「自分とはこういうものだ」という一定の感覚を伴いながら言説として表出しながら絶えず更新していく動的な概念を自己アイデンティティとする。

また、日本語学習とアイデンティティとの関わりについての実態を調査した研究では、たとえば市嶋 (2017) がある。市嶋はシリアの内戦下における日本語学習者を対象に調査を行い、学習者にとっては、たとえ日本語学習の成果が将来への就職や進学といった実益につながらなくとも、戦時下における彼らのアイデンティティを形成するための役立てている点を指摘している。さらに野村・望月 (2018) は、香港における学習者の「心の拠り所」として機能する日本語教育のあり方について焦点を当てて、学習者の対抗的アイデンティティという観点から多様な言語学習の効果について論じた。以上のように近年においては、従来のような、読む、書く、聞く、話すといった学習目的・学習成果に対する研究ではなく、日本語学習による多様な学習効果を分析した研究があり多様な学習効果や学習目的について指摘されている。

日本語学習の多面的な効果や目的からいえば、細川 (2002) は 4 技能とは異なる日本語教育の目的について考察し、「個の文化」という概念を用いて日本語教育によって学習者の社会参画へ導く能力の成長を意図する日本語教育について論じた。その後の細川 (2011: 24) では、学習者を、「個人の『能力』ではなく、ことばの活動のプロセスを通じて育まれる、一個の『人材』の総体」としてとらえ「人間のアイデンティティ形成に立ち会う教育の、本来的なあり方」に基づく教育を希求している。また、海外における多様な日本語教育の観点から佐久間 (2006: 37) は、その学習効果について、「自己認識や視野の広がり」と表現した。本研究でも日本語学習の多様な学習効果のひとつとして、自己アイデンティティの更新に着目し、学習者が主に大学生時代という青年期において日本語を学習することによって、彼自身の「存在証明」が変容していく点に着目する。

1.1 オーストラリアの日本語教育

PAC 分析による調査について述べる前に、まずは本研究の調査協力者 (以下、協力者) の背景について概観する。協力者が日本語を学んだオーストラリアは多文化主義を国是とする移民先進国として、これまでさまざまな言語教育政策を実施している。オーストラリアにおける日本語教育は 1906 年、経済交流の拡大を背景にメルボルンで始まり、その後、主に国防上の理由によって陸軍士官学校とシドニー大学で日本語教育が実施された。それから、第二次世界大戦による国交断絶を経て、戦後、日本語教育が開始・再開されるとオーストラリアは 1970 年

代に白豪主義を放棄し、アジア重視の外交と多文化主義へ舵を切った¹⁾。その際、オーストラリアの日本語教育事情で最も言語重要な政策として挙げられるのが LOTE (Language Other Than English) である。これは、第二次大戦後、700 万人が移住したとされ、そのなかでも多くの過程において英語以外の言語を話しているとされることが背景となっている。またオーストラリアは英語圏の中で政府として言語政策 (“National Policy on Languages”) を初めて打ち出した国でもあり、とくにアジアの 4 言語 (日本語、中国語、インドネシア語、韓国語) をキー言語として位置づけているⁱⁱ⁾。たとえば、本研究の協力者の父は、第二次大戦後にハンガリーから移住してきた一人であるが、協力者の事例のようにオーストラリアは移民をルーツとしたり、または移民の当事者で成り立つ国であり、バックグラウンドは多様そのものといっていだろう。本研究では、そのような多様な背景を持つ学習者の事例の一例を提示する。なお、オーストラリアの日本語教育事情にまつわる一般情報は以下表 1 の通りとなる。

表 1 オーストラリアについて

人口	約 2,575 万人 (2021 年 9 月 出典: 豪州統計局)
首都	キャンベラ (Australian Capital Territory、人口約 43 万人 [2021 年 9 月 出典: 豪州統計局])
面積	769 万 2,024 平方キロメートル (日本の約 20 倍、アラスカを除く米とほぼ同じ) (出典: ジオサイエンス・オーストラリア)
民族	アングロサクソン系等欧州系が中心。その他に中東系、アジア系、先住民など。
使用言語	英語
GDP (一人当たり)	52,825 米ドル (2021 年 4 月、出典: IMF)
宗教	キリスト教 52%、無宗教 30% (出典: 2016 年国勢調査)
教育制度	教育制度は各州により異なるが、義務教育については、各州とも、小学 1 年生に先行する準備学級の 1 年間 (Foundation/Preschool) から 10 年生 (日本の高校 1 年生に相当) までの 11 年間となっている。10 年生修了時に試験を経て義務教育修了証が発行される。日本の高校 2 年生、3 年生に相当する 11 年生、12 年生が後期段階にあたり、11 年生以降の進学は任意であるが、多くの州・学校では 11-12 学年が統合されており 12 年生まで進む学生が多い。中等教育段階修了後の教育機関としては、高等教育機関にあたる大学の他、高等実業専門学校 (TAFE) などがある。
外国語教育	英語が事実上の公用語であるが、各移民の言語も Community Language として保障されており、オーストラリア政府の支援を受け、授業校単位ではなく、地域単位で特別教室 (土曜学校、補習学校またはエスニック・スクール) を設けて指導する場合がある。オーストラリアの学校教育においては、数多くの言語が提供されており、一人が複数の言語を学ぶことも可能である。州によっては、小学 1 年生に先行する準備学級 (Foundation/Preschool) の段階から外国語教育が行われている。履修者の少ない言語は、上述の遠隔地教育により、授業が提供される場合もある。

※外務省ホームページ、国際交流基金ホームページ筆者が抜粋し作成

2. 理論と方法

2.1 理論

本研究で、言語教育とアイデンティティの関連性について調査するにあたって、調査方法には PAC 分析を用いる。筆者はこれまで以下に述べる理論に基づいて PAC 分析を行ってきた(新

井：2021, 2016, 2015ⁱⁱⁱ) が、それまでと同様に PAC 分析を用いる基盤となる理論について述べる。

本研究ではグラント・セオリーとして、まず言語をおもな媒介とした〈コミュニケーション〉をもとに社会が〈社会システム〉として成立していると捉える社会システム理論(ルーマン 1993[1984])を理論枠組みの根底に定位させる。この社会システム理論に依るならば、2人以上の間であるコミュニケーションがなされることによって社会システムが成立する。言い換えれば、あることばによってコミュニケーションが成立した場合、いかなる言語教育空間も〈社会システム〉である。また、この社会システムとは、人間の肉体を維持するための生命システムや人間のいわゆる〈心〉すなわち心理システム等の各システムと分別され、共に自己準拠的に「変容」しつづけることでシステムが存立している。本研究においては、都度自己生成を繰り返して変容しつづけているシステムのなかでも、コミュニケーションによって成立する社会システムとカップリングしながら共存関係にある変容しつづけている心理システムに着目し、その変容を言語化することを試みる。しかしながら、心理システム内部の構成については、ルーマン(1993[1984])でもその他のルーマンの著作でも、それほど深くは言及されていない。そこで、日本語学習行為の作動に必須となる心理システム、いわゆる〈心〉や〈意識〉にフォーカスするため、行為者の行為を規定する〈構造〉に着目し、理論化した社会学者のギデンズ(2015[1984])の構造化理論をさらに援用していく。ギデンズによれば、社会は行為者の「実践」に基づきながら、つねに恒常的に構造化を繰り返している。この実践は意志を前提とした行為であるが、言説化されていない。この意識構造は図式化すると以下図1のようになる。つまり、構造化されながら形成していく社会においては、言説的意識ではなく実践的意識が存在し、この無意識の動機／認知とは区別された実践的意識こそが、社会において、社会構造を再生産しうる主体的な基盤となる。つまり、この実践的意識に基づく行動によって「社会」が持続形成している。

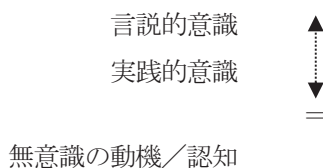


図1 ギデンズ(2015[1984]: 33)による意識についての三つの概念

この構造化理論に依拠するならば、実践的意識に基づく行為者の行動の反復によって、次第にその意識が身体化・内面化する。また、その行為者に与えられた役割や環境と相互規定的に作用する実践的意識に基づいた相互行為によって社会が再構成・形成される。つまり、日本語を学んでいるというひとつの空間・社会では、学習者の実践的意識に基づく行為が、ある帰結を生み出し、そこからまた実践的意識による行為者の行動の反復が行われる。結果、学習者は当初は意図していなかった結果に帰結に導かれる。そしてまたギデンズ(2021[1991])に依るならばこの実践的意識が、存在論的安心感という感覚の要となり、この存在論的安心感と信頼から幼児期における自己アイデンティティが発生し、その後自己アイデンティティは再帰的に

更新されつつける。本研究は PAC 分析を用いることで絶えず変容する心理システム／実践的意識の言説化を行うことで協力者の自己アイデンティティの更新過程を析出する。

2.2 方法：PAC 分析

PAC 分析とは社会心理学と臨床心理学の両方の知見を持つ内藤（2002: 1）によって開発され、「当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によりクラスター分析、協力者によるクラスター分析、協力者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」である。PAC 分析にはいくつかの特徴があるが、特筆すべき特徴は、特に本人ですらあまり意識していないような意見が引き出させる（末田 2011: 246）ことである。つまり、PAC 分析は実験者によって構造化・半構造化されたインタビュー形式よりも、調査をインタビューの協力者自体で連想する語や文を自由に記述する作業から開始し協力者自身で語りをを行うプロセスによって、協力者各個人の言説化されていなかった内面、すなわち、心理システム／実践的意識に瞬間的に迫り、その瞬間的な意識の変容を言語化することが可能となる。本研究では以下の PAC 分析（内藤 2002）の手順に倣い以下の通りにインタビューを行った。

- a) 協力者に連想刺激文が与えられる
あなたが日本語を勉強していたとき、どう感じていたか、どんなイメージを持っていたか、その感じたことやイメージを言葉や短い文章でこのカードに書いてください。
- b) 協力者は思いつくままに連想した言葉や文章をひとつずつ一枚のカードに書く。
- c) 協力者はカードを重要な順に並べる。
- d) 協力者はカードの組み合わせのイメージを各ペアがどの程度類似しているかについて「非常に近い」から「非常に遠い」までの 7 段階で評価を行い実験者は類似度距離行列を作成する。
- e) 実験者によって類似度距離行列から作成されたデンドログラムに基づき協力者はインタビューを受ける。具体的にはまとまりをもつクラスターとして解釈できそうなグループを協力者が提示し、まとまりだと思ふ理由やクラスター間の関係、各項目のイメージ（プラスかマイナスか）を評価する。なお、協力者の許可を得て IC レコーダーで録音。使用言語は日本語を使用したデンドログラム作成には IBM 社の SPSS. ver 20 を使用した。

2.2.1 調査対象者と調査概要

2019 年 11 月に約 2 時間程度の PAC 分析を用いたインタビュー調査を行った。協力者はオーストラリア人で、ハンガリーとアイルランドの血統である父と日本人の母を持つ男性である。協力者は中学・高校・大学で日本語を体系的に勉強した。また幼少期より定期的に母の故郷である日本に短期滞在している。JLPTN1、漢字検定 5 級所持者であり、調査時点で日本の大学職員として働いていた。属性は以下ようになる。

表 2 オーストラリア人元日本語学習者協力者の属性

年齢	性別	属性	日本語学習歴
40 代	男性	大学職員	18 年（中学校・高校 5 年 大学 3 年 独学約 10 年）

3. 結果

それでは結果を見てみることにしよう。協力者が書いた想起内容と想起順、重要度、イメージは表3のようになる。またデンドログラムと類似度距離行列は次ページ図2、表4となる。

表3 オーストラリア人元日本語学習者の属性

重要順	想起内容	想起順	※1
1	禅	9	+
2	Suzuki Daisetz ※2	15	+
3	Buddhism	14	+
4	Reginald Horace Blyth ※3	16	+
5	Haiku	17	+
6	宮城県	6	+
7	とんねるず	5	+
8	Dragonball	1	+
9	Tampopo	2	+
10	Akira Kurosawa	3	+
11	Beat Takeshi	6	+
12	Dr. Slump	10	+
13	日本語能力試験	13	+
14	漢字	8	+
15	「は」と「が」※4	7	○
16	Mr. Lee ※5	11	+
17	「あ」「か」「さ」.....※6	4	+

※1 +は各想起内容に対して協力者はポジティブなイメージを抱いていることを示す。

※2 鈴木大拙：海外に禅や日本文化を広めた仏教学者。

※3 Reginald Horace Blyth：イギリス出身の文学者。海外に俳句を英語で紹介した。

※4 日本語の助詞「は」と「が」の違いについての意。

※5 協力者が中学時代に学んだ韓国系の日本語の先生の名前。

※6 ひらがな「あ」「か」「さ」行の意。

Ward 法を使用するデンドログラム
再調整された距離クラスタ結合

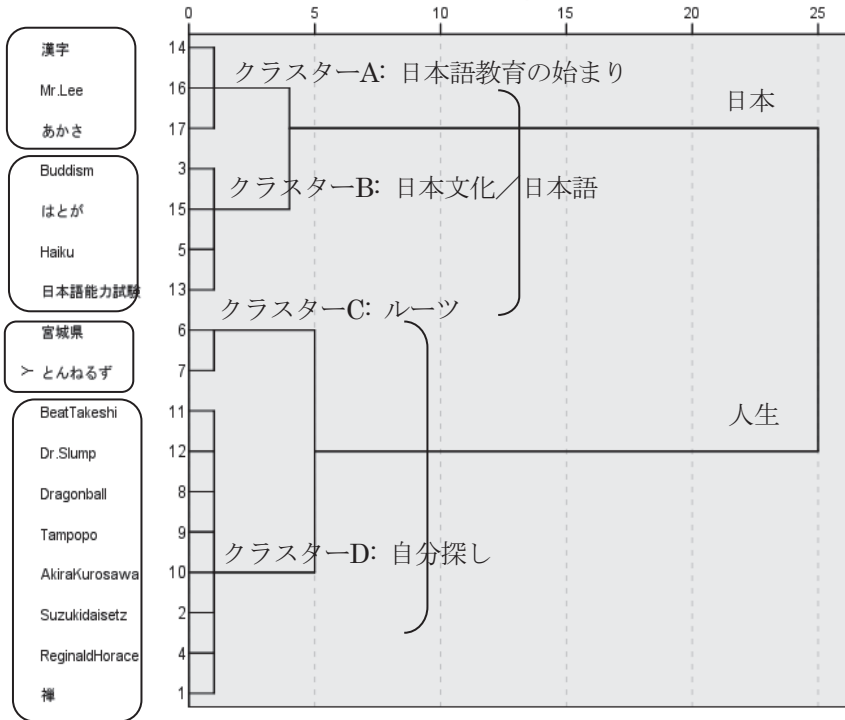


図2 調査協力者のデンドログラム

表4 調査協力者の類似度距離行列

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1	0																
2	1	0															
3	1	1	0														
4	1	1	1	0													
5	1	1	1	1	0												
6	3	7	3	3	1	0											
7	7	7	4	6	3	1	0										
8	1	1	1	3	3	1	1	0									
9	4	2	3	6	3	6	1	2	0								
10	1	2	1	1	1	5	1	2	2	0							
11	3	2	2	2	2	6	1	2	2	1	0						
12	6	4	4	4	5	4	1	1	4	4	4	0					
13	1	1	1	2	2	6	5	5	5	4	4	6	0				
14	1	1	1	2	1	6	5	5	3	4	3	4	1	0			
15	5	2	2	3	3	6	6	5	4	5	4	5	1	3	0		
16	2	3	2	2	3	7	7	5	4	5	4	4	3	3	4	0	
17	4	4	2	4	3	7	7	5	5	5	5	5	3	1	2	1	0

■協力者によるクラスターのイメージと解釈

各クラスターの違いについての説明

そうですね。たぶん、それぞれの時期的に影響されてた物。それぞれの時期の違いですね。

各クラスターの想起内容についての説明：クラスターA (14-17) について

14 漢字

これ (13 日本語能力試験) と関係する。日本語能力試験を合格するために。(Q: 漢字は独学ですか) そうですね。交換留学行ってたんで、2001年、O大学からS大学^{VI}にくる学生がいて。1人とチューターになってもらったんですね。週に何回か会って。2001年5人が来て、今でも4人と連絡取り合ってます。

16 Mr. Lee

中学校の日本語の先生。韓国人で、ずっとオーストラリアに住んでて、その学校の日本語の先生。それで、面白い人で、いつも授業中に先生は寝てしまって。先生は自分から(笑)何か課題やって。そのうち気づいたら、がー(笑)結構、そのときもう50後半、60とか。(Q: 日本人の先生はいなかったんですか?)で、その途中、日本人も入ってきて。若い。大変でしたね。男子校だから(笑)いじめとかいうか、からかわれる。すごい真面目な先生。一生懸命、日本語教えようとしても誰も話を聞いてくれない。(Q: 私立の高校に行った理由はなんですか?)小さいときからテニスをやっていて、年上の友達、テニス仲間が学校に通っていたんで。その友達のお母さんもその学校で働いてたんで。小さいときからその学校自体が、意識はあったんで。スポーツもなんかできそうな学校だったんだんで。軽く親父に言ったら、じゃあ、分かりましたって。(Q: 試験はあるんですか)あ、面接はあった。友達のお母さんもそこで働いてて、推薦してもらえたんで。(Q: 私立はお金持ちがいくイメージですが)周りは超金持ち。家以外は。(笑)

17 あかさ

これはもう中学校ですね。Mr. Lee (16)というのも中学校の先生ですね。特にひらがな、カタカナ、漢字を勉強するときに、「あかさたな、はまやらわ」ひらがなと書き練習。中学校は、オーストラリアの男子校。オーストラリアは中高一貫校です。他の学校とは比較できないですけど、中学校からラテン語、フランス語が必須でした。2年生になると、ラテン語は継続。2年生からはドイツ語、フランス語、日本語の選択科目になる。2年生になって、ラテン語、フランス語もやって、日本語も選択しました。(Q: 3言語も学んでたんですね。)学んでたんですけど、頭がおかしくなって、フランス語を止めました。ついていけなくなった。ラテン語もいまいち意味がわからなくなった。そのときは中国語は無かった。そのときは、フランス語と日本語が一番人気だった。そのときは日本を経済的に理解する必要があったんで。それまで日本語も勉強することもいっぱいありました。1988年。日本はまだバブル時代。日豪経済関係。(Q: オーストラリアは何の貿易してたんですか?)あ、資源ですね。鉄鋼、石油、石炭とか、で、それに日本が加工して、またオーストラリアに輸入する。加工された金属が産業に使われる。

クラスターB (3-13) について

3 Buddhism

これは大学入ってからね。最初に物理学で入って、途中から日本語学科も編入して、そこから日本思想といますか。それで、ええっと、まあ、あのう、応用物理学を勉強してい

るなかで、意識（Consciousness）を勉強しているなかで、たまたまある記事を読んでいるなかで、物理学の根本的な思想と、禅仏教の根本的な思想が、なんか似てるんじゃないか、という記事を読んで、そのときまでは禅・仏教はまったく興味なかったんで、はじめて禅仏教を知って、そこから興味を持つようになって、それから古本屋で仙厓義梵（せんがいぎぼん）の本を見て、鈴木大拙が解説してるんですが、それで鈴木大拙を知ってさらに禅仏教の思想に興味持って……そこから興味が広がりました。根本的に意識がどこから生まれるか。物質的なものが意識はどこから、発生する。オーストラリアの大学時代のことです。

15 はとが

ええとこれは、2000年O大学に留学したときに、日本語の授業、日本語の先生が出版した本が「はとが」。ですから、日本語よりもやたらと「は」と「が」それが印象的でした。

クラスターC (6-7) について

6 宮城県

まあ、母の故郷でね。初めては、4、5歳ぐらい。よく夏休みとか、遊びに行つて。祖父ちゃん、祖母ちゃんと遊んで。2、3年に1回ぐらいかそこら。田舎。行く度に心が落ち着く。性格的にですかねえ。ここはなんか良いなあ、と。(Q: お父さんの故郷のハンガリーは行かないんですか?) ハンガリーは1回しか行ったことない。ゆっくり出来なかったんで。まあ、父が亡命したから、亡命してから一度も行ったことないし、家族を連れて行こうとは思ってなかったんじゃない? 父が苦勞したことを考えると、こういうところかなあ。国がめっちゃくちゃ。1956年、国がめっちゃくちゃだった。ほとんどみんな亡命して。(Q: 亡命先はオーストラリアが多いんですか?) いやアメリカが多かった。ほかの近隣国行つてから、なんです、他の父のお姉さん他の親戚なんかはアメリカへ行つて。父が残されて、まあ、自分も亡命するしかない。父は1969年26歳のときに亡命した。オーストリアに亡命して、そうしてからオーストラリアに移住。(Q: オーストラリアは移民が多い?) そうですね。とくに70年代。第二次世界大戦が終わつてから、労働力が不足して、積極的に、とくにヨーロッパからの移民は受け入れてたんで。父がヨーロッパでシェフをしていたんで、オーストリア料理をオーストラリアに提供できるなら、どうぞよろこばせ。(Q: 苦勞したんですか?) オーストリアでは陸軍。あ、オーストラリアでは、ちょうどオペラハウスが出来て。一杯料理のレストランが出来てたんで。もうすぐ普通に。

7 とんねるず

「下品」ですね。当時はおもしろかった。(Q: 幼い頃の思い出?) シドニーの母のレストランで働いてた日本人の方が当時のテレビ番組を録画して持ってきた。それを貸してもらって見てた。宮城県の思い出。シドニーで母がレストランを経営してた。そこで働いたシェフ。日本人の人。日本の番組をビデオにとって持ってきたか、送ってきたか忘れた。それはわかんないですけど。(Q: ; 何歳ぐらいのときですか) 小学校だったり中学校ぐらいのとき。10才から12才ぐらい。その辺。

クラスターD (11-1) について

11 Beat Takeshi

(Q: 北野武の映画はどんなイメージですか) 暴力。やくざ系。それも一つ。やくざの世界もそ

れを通じて知ることができた。

8 Dragonball

大学時代ですね。(Q: 大学?) 1回、大学2年生か3年生のとき、日本へ来て、母の友達が喫茶店を経営して、で、そこでアルバイトをしました。英会話。一ヶ月か二ヶ月滞在して、そのとき、ドラゴンボールを発見して。えっとそれは名古屋。で、それを全部買って、オーストラリアに持って帰って、それがぼくの日本語の教科書(笑) ふりがなが振ってあるから。漢字、まったく読めない。42巻全部。大好きでした。

12 Dr. Slump

まあ、同じ時、ドラゴンボールほどではないけど、何冊か、買って。

13 日本語能力試験

初めて受けたのは2000年。それに向けて、ほぼ毎日。N2に向けて。漢字ドリルとか、語彙集みたいなのを買って。それに向けて勉強しました。その試験がなかったらそんなに勉強しなかったんで。繰り返し、書いて。N1はX大に入って、留学生と一緒に会場に行って、ぎりぎり合格(笑)

8 Tampopo

(Q: 映画についてなにか思い浮かぶことはありますか。黒澤明でもいいんですか) 「羅生門」とか。うんと、基本的に「7人の侍」が好き。Youtubeとか何もなかったんで。(Q: やると分かったら全体見る?) そう。だって2週間に1回ぐらいしか。少ない。月1回とか。(Q: 見たのはAさんだけですか?) 一緒に日本語を勉強してた友達も見てた。結局当時はテレビでやるものしか見ることができない。映画。なぜか、海外の番組をチャンネルがひとつあった。世界のニュースとか。ときどき、なぜか日本の映画、黒沢とかビートたけしの映画。「たんぽぽ」もしょっちゅうやってた。ある意味、ひとつの日本語の教科書。面白かったですね。映画。

10 Akira Kurosawa

一緒ですね。ビートたけしもぜんぶ一緒。大学入るぐらい。90年代初め、90年代半ばそのあたりですね。

5 Haiku

2000年、O大学留学。もう最初から座禅を毎週行って、留学生寮に住んで、寮の近くに禅寺があったんだ。で、まあ、禅には興味があったんで、大学の先生に座禅体験してみたいと。すぐお寺に、臨済宗のお寺があって毎週土曜日座禅会やっていますんで、わざわざ電話してもらって、行って良いですか? 全然来て下さい。って、そこから、ええ、まあ前に話したイギリス人の彼が英訳してる本を発見して、日本文化を理解するためのひとつの方法ですね。(Q: 理解できました?) 出来ましたね。解説があったり、英語でも書いてあったり。日本語も昔の日本語ですから。(Q: 日本人も無理だと思ふ解説なしで俳句だけ) その英訳を読んで、やっとな俳句の意味を理解して、日常生活にどう結びつか、感じるようになって。(Q: かなりマニアックな学習者ですね) (笑) 好きなものがないと勉強しないんじゃないですか?

2. Suzuki Daisetz

まあ、禅ですね。Introduction To Zen Buddhismとかいっぱい、まあ英語で出して、それを読んで、それを全部読んで、けっこう一般的な日本文化の紹介もあるんですけど、さらにもっと、仏教のなかのマニアックなインドの仏教とか中国の仏教とか、それぐらいいいと、けっこう難しい。

(Q: Aさんの宗教は?) もう、ない。無宗教。宗教自体は興味ない。ある宗教を信じすぎると

他を排除する。問題がある。もうひとつは○大学時代、アメリカから来てた留学生がいて、彼は宗教学を勉強していて、で、まあ、彼は一応キリスト教だけど、曹洞宗もイスラム教も勉強して、彼にとってキリスト教が合っている。何にも知らないでキリスト教だけはおかしいじゃないか、まあ、そういう彼の話聞いて。なるほどなあ。たしかに。そこがひとつの宗教を信じない理由。

4. Reginald Horace Blyth

俳句を翻訳し、禅を英語で世界に広めた人でもある。本を通じて日本文化を理解することができた。

1. Zen

(笑) 繰り返しになりますけど。まあ、あの何だろう。ルーツが日本にあるから、西洋よりも日本に合ってることが分かって、ひとつの方法としては禅を勉強すれば、禅がすべての日本文化に影響を及ぼしているじゃないんですか。

■各クラスターのイメージ

(クラスターA) 日本語を勉強することですね。(クラスターB) 青春時代 (クラスターC) 日本に興味があって、日本語に関連するものを何でも吸収する時期。(クラスターD) 「自分探し」ですね。自分は何者か。と (Q: 大学で応用物理学に進んだ理由はどうしてですか) ひとつは中学校の先生の教え方が良かった。ひとつはわかりやすい物理学の減少とか聞いて理解できてたんで、それで物理学の勉強までしてしまっただけです。マスターは行ってない。ダブルディグリーだけど。経済とかビジネスの勉強もしたけど全然興味なくて、科学には興味があって。それでまあ、高校も勉強して、将来当時はパイロットの仕事をしたかった。空軍のパイロットになりたかった。それで工学とか理系を勉強しないといけなかった。(Q: 日本語を勉強してから変わったんですか?) 変わったね。

■各クラスターの違い

AとBの違い: これ (B) は留学の時期。これ (A) はオーストラリア。

AとCの違い: 時期、これまた時期。Cはぜんぜん日本語の勉強を意識していない。

AとDの違い: これ (A) は中学校、高校。これ (D)、高校大学。

BとCの違い: まあ、これ (B) は日本語。これ (C) は日本語じゃあ、無いですね。

AとDの違い: AとDはそんなに大きい差はないと思いますね。時期だけですね。

CとDの違い: CとDは根本的に違う。

■各クラスターに名付ける

A「日本語教育の始まり」 B「日本の文化、日本語」 C「ルーツ」 D「自分探し」

■補足質問

(Q: Buddhism とは何ですか?) まあ、性格ですね。まあ結局、あの。書いても良いですか? (「本来無一物^{vii}」と紙に書く。) 禅につながるんですが…本来何も存在しない。脳が全部作っている。実際全部作っている。それが仏教につながって永遠に自分につながる。

(Q: なぜ、Buddhism、鈴木大拙なんですか?) よくこのときに思い出す詩。(「春色無高下花枝自短長^{viii}」と紙に書く。) 要は世界で優れた物、低い物はない。みんな自然そのもの。それ

だけです。(Q: こういった物事を追い求めていたら日本語学習に行き着いた?) 母が日本人だから、日本人だから避けられない部分。中国も関係ないし。韓国も関係ない。日本がここに存在するから。日本語がここにあるから。それがなぜか自分のなかで生きてる。(Q: お父さんのルーツについてはどうですか?) 自分は、性格は母に似ている。親父の性格とは全然似ていない。妹は父親の性格に似ている。典型的性格。短気で、すぐキレる。激しい。それは自分ではない。

(Q: ちなみに、オーストラリアの人もそういうところがあるんですか?) ええ、ありますね。

(Q: 自分自身はそういうのとはちょっと違う?) 違います。大学時代に気づいた。仏教だったり、鈴木大拙だったり、俳句だったり。日本語よりもアイデンティティの問題ですかね。

4. 考察とまとめ: 総合的解釈

クラスターは大きくは2つ、細かく4つに分けられる。協力者によれば、各クラスターは、概ね日本語学習をしている際の「時期的な違い」により分かれる。Aはオーストラリアの中学生時代、Bは日本の大学に一年間交換留学していたときのイメージであり日本語学習に関するイメージである。それに対してCは日本語学習というよりもむしろ協力者のルーツに関するイメージである。宮城県とは協力者の母の故郷であり、幼少期から数年に一度家族で帰省し、「心が落ち着」いたという。そのため協力者は「ルーツ」と命名している。またDは、オーストラリアの大学で日本語を学習していた時期である。協力者は日本語学習をしながら次第に鈴木大拙の思想や禅に惹かれていく。協力者は、日本語学習をしながら同時に、禅から「本来無一物」という事物はすべて空であるという思想や「みんな自然そのもの」であるという「春色無高下花江」の詩などを学び、自己アイデンティティを更新させていた。

またクラスターAとクラスターBは、日本語学習に必要とされる教育・学習・言語学的内容によって構成され、協力者は「日本」と命名した。ちなみにクラスターBにある3.Buddhismは、留学していた際実践していた座禅からくるイメージである。CとDは、日本語学習へと導く日本の文化や社会的側面や自らのルーツから構成され、「人生」と命名した。これらすべてまとめて、協力者の自己アイデンティティの基盤となった物事である。本調査結果は、その動的な様相をPAC分析によって瞬間的に言語化し再構成したといえる。調査の結果から、オーストラリア人としての生まれた協力者にとって日本語学習とは、自らのルーツを確認したり、「禅」に代表される日本思想への学びを深めることによって、自己アイデンティティを更新していた事実があることが分かった。また、その意識について、協力者は「母が日本人だから、日本人だから避けられない部分。日本語がここにあるから。」と語り、自らのアイデンティティと密接に結びついていることを語った。

本調査結果について言葉を換えるならば、日本語学習に付属する母親の出身国日本の文化や思想を含めた日本語学習をある意味、野村・望月(2018)で述べられた「心の拠り所」としていたともいえる。また日本語学習によって佐久間(2006)で語られた「自己認識や視野」を広げていたといえないだろうか。さらにそのようにして自らの自己アイデンティティを変容させていくことで、言語学習前とは異なった新たな思考様式、行動様式を身につけていったともいえよう¹⁵。協力者は、実際にオーストラリアの大学卒業後に日本で仕事を心得、現在は日本の大学で大学職員をしながら、国内に家庭を築いて生活している。

以上より、言語学習とは自己アイデンティティの形成に深く関わり、4技能の熟達とは別次元で、協力者の事例のような、まさに多様な帰結を導く可能性があるといえよう。

付言

本稿は、2019年12月19日（土）金沢しいのき迎賓館で開催されたPAC分析学会第13回大会の「日本語学習が導くアイデンティティの変容とは—オーストラリアの日本語学習者を事例として—」の口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。

参考文献

- 新井克之（2015）「いわゆる“実益”に結びつきにくい日本語学習の意味—グアテマラの学習者にPAC分析を用いて—」『海外日本語教育研究』1,31-56
- 新井克之（2016）「海外におけるJICA派遣による日本語教師が意図するもの—青年海外協力隊の事例を参照にして—」『地球社会統合科学研究』4,13-29
- 新井克之（2022）「海外における義務教育での英語学習と自発的な日本語学習との学習動機の差異—メキシコの学習者にPAC分析を用いて—」『朝日大学留学生別科紀要』19,45-56
- 市嶋典子（2020）「外国語の学びとアイデンティティ—シリアの日本語学習者による語り—をてがかりに—」『複言語複言語・多言語教育研究』8,39-54
- エリクソン・H・エリク（1959[2011]）『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房
- ギデンズ, アンソニー（2015[1984]）『社会の構成』門田健一（訳）, 勁草書房
- ギデンズ, アンソニー（2021[1991]）『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』秋吉美都, 安藤太郎, 筒井淳也（訳）, 筑摩書房
- 佐久間勝彦（2006）「海外に学ぶ日本語教育—日本語学習の多様性—」『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』アルク, 33-65
- 嶋津拓（2008）『オーストラリアにおける日本語教育の位置—その100年の変遷』凡人社
- 末田清子（2011）「19 PAC（個人別態度構造）分析」『コミュニケーション研究』末田清子, 抱井尚子, 田崎勝也, 猿橋順子編著, ナカニシヤ出版, 245-260
- 高橋聡（2012）「言語教育における, ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10(2), 37-55
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門[改定版]個を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 野村和之・望月貴子（2018）「『心の拠り所』としての日本語：香港人青少年学習者による日本語学習のエスノグラフィー」日本語教育(169), 1-15
- 細川英雄（2002）『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理論と実践—』明石書店
- 細川英雄（2011）「日本語教育は日本語能力を育成するためにあるのか：能力育成から人材育成へ—言語教育とアイデンティティを考える立場から」早稲田日本語教育学 9, 21-25
- 宮崎里司（2012）「総括(<特集>2011年度オーストラリア学会全国研究大会 シンポジウム オーストラリアの言語教育政策:多文化社会化する日本への提言)」『オーストラリア研究』25(0), 1
- ルーマン, ニクラス（1993[1984]）『社会システム理論 上・下』佐藤勉（訳）, 恒星社厚生閣

Web site

外務省ホームページ「オーストラリア基礎データ | 外務省」

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html#section1>

(2023年2月15日最終閲覧)

国際交流基金ホームページ「国際交流基金 – オーストラリア (2020年度)」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/australia.html>

(2023年2月15日最終閲覧)

-
- i オーストラリアの日本語教育史に関しては、嶋津 (2008) に詳しく、本稿の当該記述箇所も多くを負っている。
 - ii 以上のオーストラリアの言語教育についての概要説明は宮崎 (2012) に多くを負っている。
 - iii 新井 (2015,2016) では、本稿の以降に述べる PAC 分析によるギデンズの実践的意識の言説化、新井 (2022) においては、PAC 分析とルーマン (1993[1984]) とギデンズの理論の融合について言及している。
 - iv オーストラリアの協力者が在学していた大学のことを指す。
 - v 協力者の現在の勤務先である大学のことを指す。
 - vi 協力者の名前を呼んでいる。
 - vii 存在する物は、本来すべて「空」であるため、わが物として執着すべきものは一つもないこと。一切のものから自由自在になった心境。
 - viii (しゅんしょくこうげなく かしおのずからたんちょう) と読む。花には様々な形があり、大きさや色も枝の長さもそれぞれである。それぞれにどれも同じように太陽の光があたる、という意。
 - ix 新井 (2015: 54) では、グアテマラ人日本語学習者の PAC 分析結果から、「彼らがこれまでの人生で遭遇したことのなかった新たな思考様式、行動様式を獲得」していく点について述べている。